

河上肇記念会会報

No. 6.
1978. 6.

〒530

大阪市北区梅ヶ枝町一九九（星光ビル）
菅原法律事務所内 河上肇記念会

電話 (06) 三六四一六七七一
振替口座 大阪 三三一九五

特集 第三十二回京大河上祭

第三十二回河上祭趣意書

皆様方の暖かい御指導御支援の下に、河上祭も今年で三十二回目を迎えることとなりました。私達、河上祭実行委員会としましては、本年も来る六月に講演、映画会、交流会、討論会等数多くの行事を予定して、これを是非とも成功させたいと願っております。

河上祭は、一、私達大学人はとりわけ真理を愛し真理に忠実であるべき者として、河上肇博士が自己の生き方のなかに示された、科学的精神と真のヒューマニズムを結合したいわゆる河上精神を継承すること、一、戦前の天皇制権力のもと、大学自身がファシズムの圧力に屈してしまい、河上先生を大学から追放してしまったことに対する深い反省から、大学に強固な自治を築き上げ守り発展させること、を河上祭の二つの大きな目的として毎年開催されてまいりました。

昨年の河上祭は、『科学とヒューマニズム』というテーマを掲げ、私

達大学人が学問を行っていく際に、それが社会科学であろうとまた自然科学であろうとおよそ科学と呼ばれるものを学び探究していく際に、ヒューマニズムというものがどのようににかかわってくるのかということを考えてみました。そもそもヒューマニズムとは一体何なのか。また、そのヒューマニズムが科学と如何なる関係があるのかということを問うてみました。河上精神といわれる中にみられるヒューマニズムとは何であるかを考え、現在に生きる私達がどのように捉え行動すべきかを考慮してみました。昨今の日本の状況を考えてみますに、高度成長時代から低成長時代への移行にともなって、資本主義の構造的な歪が露呈されてきました。公害問題・都市問題に顕著に見うけられるとおりです。

河上祭は前述の二つの大きな目的を掲げて過去三十一年間開催されてまいりました。この二つの目的こそ、我々学生が、そして広く学問するものが常に肝に銘じ、そして、それをふまえて現実を見つめ、学ばなければならぬ事柄であり、それが故に過去三十一回もの河上祭が毎年開催されてきたのだと思っております。私達は今こそ、河上先生のご思想や生き方を学び、私達の学問観、大学観をもう一度きびしく見つめ直すとともに、それを発展させて、大学の全構成員が団結し更に地域住民・国

民と広く連帯して大学の自治を守り発展させていかなければならないと
考えています。そして真に国民に開かれた大学を創り上げなければなら
ないと思います。

私達河上祭実行委員会は、河上精神を大学の全構成員に喚起し継承し
ていくために、大学の自治を守り発展させるためにも、また真に国民に
奉仕する民主的インテリゲンチヤとなるためにも、第三十二回河上祭を
大きく成功させたいと思っております。そのためにも、まだまだ未熟な
私達に対して、何卒皆様方の積極的な物心両面の御援助と御指導をお願
いしたいと存じます。

スケジュール

6月15日(木) 午後4時30分～7時30分 日本イタリア会館

(講演会)

「河上肇と資本論」

甲南大学教授 杉原四郎氏

「日本経済の現状と諸問題」

大阪市立大学教授 林 直道氏

6月17日(土) 午後1時～3時

京大教養部

(映画会)

「死刑台のメロディ」

6月19日(月) 午後6時～9時30分

京都教育文化センター

(河上祭の夕べ)

記念講演「現代民主主義の諸問題」

名古屋大学教授 田口富久治氏

映画 「武器なき闘い」

一九七八年四月

第三十二回河上祭実行委員会

河上肇記念会より

第三十二回京大河上祭に対する御協力方をお願い

謹啓 初夏の候 益々御清栄のことと拝察申し上げます。

当河上肇記念会に対しましては、日頃種々と御協力を賜わり有難く厚
く御礼申し上げます。

最近漸く事務局も充実し、会報の発行、例会の開催など基本的な会
務もほぼ順調に進み、入会者も増え、来る昭和五十四年の河上肇生誕百
年記念行事の準備に鋭意努力中でございます。

しかしこれら当会の諸活動も年々老令化してまいります会員層の多い
当会にとつては、何かと負担になりつつある昨今であり、河上肇に深い
関心を寄せる若い諸君の協力、援助が切望される現状であります。幸
い有為な青年諸君の参加をみつつあることは、当会の将来のために心強
く感じている次第でございます。特に河上肇没後、一度も途絶えること
なく、毎年河上祭を開催し、河上精神を継承してきた京都大学の学生諸
君の情熱と行動力は、当会発展の一大原動力となるべきものと思われま
す。

本年の第三十二回京大河上祭は、六月十五、十七、十九日の三日間、
京都大学周辺において、河上肇にちなんだ講演会と映画会を開催の運び
となり、先般、これら行事の推進のため、河上祭実行委員会の諸君と当
会事務局が打合せ、当会は全面的な協力をいたすことに決定いたしました。

日頃の御厚情の上に更に重ねて御願いに及び、まことに心苦しく存じ
ますが、特に当会と河上祭との関係を御賢察下され、何卒若き諸君に対

する御援助、御協力の程衷心よりお願い申し上げます。
右略儀乍ら書中をもって失礼いたします。
敬具

昭和五十三年五月

河上肇記念会 世話人代表 住谷悦治

「京大河上祭略年表」

★第一回 昭和22年 不明

★第二回 昭和23年 1月30日

講演会 会場 京大法経一番教室

あいさつ 末川博（河上肇博士義弟）

「財政の危機について」 島森彦京大助教授

「河上先生の思い出」 小林世界経済研究所長

「国際情勢」 堀江昌一

「河上先生をしのぶ」 長谷部文雄

「インフレについて」 宮川実マルクス・レーニン

「学問の良心と実践」 宮本顕治日本共産党中央委

員 研究所長

閉会の辞 名和統一大阪商大教授

★第三回 昭和24年 1月30日

講演会 会場 京大法経一番教室

「平和のための社会科学を」 末川博

「働く人々の幸福を」 河田賢治衆議院議員

★第四回 昭和25年 1月30日

講演会 会場 京大法経一番教室

「遺志は中国に生きる」 平野義太郎中研所長

「戦争を防げ」 高倉テル日本共産党中央委員

「人を信ずる人」 静田均 京大教授

題名不明 羽仁五郎参議院議員

なお、この会では、京都市長に立候補の高山義三氏を

招いていたが、大学当局から、「選挙運動になる」との

理由で中止を通告されている。

★第五回 昭和26年 1月31日

スローガン

「全面講和の即時締結と講和後の再軍備反対」

講演会 会場 京大法経一番教室

あいさつ 名和統一大阪市大教授

「最近の国際情勢と全面講和」 堀江昌一 東京都教育委

員

講和投票についての説明 島森彦京大教授・民科京都支

部長

「良心について」 柳田謙十郎

「人間としての河上」 末川博立命大総長

なお、この河上祭では河上博士好物のまんじゅうにち

なみ、「全面講和」の四文字を焼きたて「河上まんじ

ゅう」を売り出す。吉田神社の節分祭の時にも、この「

河上まんじゅう」の出店をだし、千個を売り切った、と

ある。

★第六回 昭和27年 1月31日

スローガン 「遺志をつぐん平和への誓い」

學術講演会 会場 京大法経三番教室

宮川実・中村哲

追悼記念講演会 会場 京大法経一番教室

あいさつ 末川博立命大総長

河上博士「みそ汁の詩」朗読 毛利綱枝（劇団くるみ

座）



「河上さんの思い出」 長谷部文雄

題不明 布施自由法曹団弁護士

「平和を守れ」 大山郁夫

★第七回 昭和28年

1月21日 映画会 「羅生門」 京大西部ホール

1月24日 講演と討論の会 於京大吉田分校

「植民地日本の現状とそれを打破するか」

講師 上林貞治郎外二名

1月28・29日 映画会 「セールのスマンの死」・「ドイ

ツ零年」 於京大西部ホール

1月27日 講演会 末川博・福井孝治・名和統一外

於立命館法経23号

1月30日 講演会 於京大宇治分校講堂

講師 真下信一・戸沢鉄彦・名和統一

講演会 於鴨沂高校講堂

講師 風早八十二・前芝藤三

1月31日 講演会 於京大法経一番教室

講師 風早八十二・服部之雄・神戸正雄・谷口吉彦

講演会 於同大明徳館

講師 真下信一・風早八十二・服部之雄・長谷部

文雄・住谷悦治

★第八回 昭和29年 1月29日 前夜祭 その他不明

「試験前で参加者少なし」とある。

なお1月25・29日に宇治分校で独自に河上祭を持った。

その内容は 講演会 作家阿部知二・帆足計参議院議員

★第九回 昭和30年 1月28・31日

滝沢修・畑中繁雄日本評論新社社長からメッセージ

★第10回 昭和31年 不明

★第11回 昭和32年

1月24日 展示会「河上肇の思想とその生涯」京大図書館

1月25日 レコードコンサート 京大法経七番教室

1月26日 記念講演 会場 京大法経四番教室

「河上肇と現代」 羽仁五郎参院議員

「河上肇に関するメモの中から」 大塚有章

「河上肇の人間像について」 桑原武夫京大教授

「河上博士と経済学の現代的問題」 松井清京大教授

なお、中国科学院院長郭沫若氏から河上祭へのメッセージがあった。

★第12回 昭和33年

1月23日 「公開ゼミナール」 京大法経八番教室

レコードコンサート 京大法経七番教室

映画会 1月23日 「巴里の屋根の下」

1月24日 「オセロ」

1月24日 「原水爆禁止に関するシンポジウム」

講師 前芝確三立命大教授・堀江英一京大教授・四

手井綱彦京大教授等 於京大法経七番教室

1月25日 講演会 於京大法経一番教室

講演者 あいさつ平沢京大総長

畿川京都府知事・平野義太郎日本平和委員会理事

長・名和統一大阪市大教授・詩人小野十三郎・島

恭彦京大教授

1月23日、25日 展示会 「戦争か平和か」

於吉田分校尚賢館

★第13回 昭和34年

映画祭 於京大西部講堂

1月17日 「キッド」

1月22日、23日 「悪法—国民弾圧の歴史—」

「ピカソ—この天才を見よ—」「エイゼンシュテイン作

講演会 1月24日 於薬友会館

「国家独占資本主義段階における労働運動」 斎藤一郎

「唯物弁証法の現代的諸問題」 三浦つとむ

「資本主義は変わったか」 松井清京大教授

なお、生協が「河上まんじゅう」を発売、とある。

★第14回 昭和35年

4月23日 講演会 於京大法経第一教室

「経済」 島藤彦京大教授 「哲学」 藤野名古屋大学

助教授 「思い出」 福井孝治大阪経科大学長

シンポジウム 於吉田食堂二階

4月22日 「日本学生運動の当面する課題」

4月23日 「貿易自由化と日本の政治・経済」

助言者・小野一 郎京大助教授

研究発表会 於京大法経七番教室

4月24日 「現代資本主義」

4月21・22日 映画会 於京大西部講堂

スペイン映画「恐怖の逢いびき」

フランス映画「白い少女」

4月23日 東映「季節風の彼方に」

★第15回 昭和36年

河上祭の夕べ 4月21日 於京都公会館第二ホール

講演 「河上肇先生の思い出」 大塚有章

映画 「武器なき闘い」

4月22日 講演会 於京大法経一番教室

「平和共存の現代的意義—平和運動と社会科学—」

安井郁日本原水協理事長

「平和と民族解放の闘い キューバ革命」

「ドル危機と現代資本主義」 松井清京大教授

4月22日 シンポジウム 於吉田食堂二階

「八十一カ国共産党声明と構造改革論」

★第16回 昭和37年

6月1日 於 祇園会館

講演 「河上先生における社会科学の真理と宗教的真理」 住谷悦治同大教授

映画 「10月のレニン」

6月2日 講演会 京大法経第一教室

「最近の南朝鮮の現状」 呂南越朝鮮高等学校教務主任

「憲法問題について」 井上清人文研教授

「河上先生における求道と科学」 出口勇蔵京大教授

シンポジウム 於知恩寺 「就職への再検討」

★第17回 昭和38年

基本テーマ「歴史におけるインテリゲンチヤの使命」

6月7日 河上祭の夕べ 於祇園会館

講演 長谷部文雄

演劇 「草原の歌」 人間座

6月8日 講演会 京大法経第一教室

「戦前のファッショ体制下におけるインテリゲンチヤ」

末川博立命大総長

「安保闘争総括と日韓会談への指針」 塩田庄兵衛都立

「今日のインテリゲンチヤの課題」 尾崎芳治京大経済手

シンポジウム 講師 塩田・尾崎 於知恩寺

★第18回 昭和39年

基本テーマ「労働者階級と知識人」

6月12日 河上祭の夕べ 京都教育文化センター

講演 中野重治

演劇 構成詩劇「不知火」 ひまわり合唱団

6月13日 講演会 京大法経第一教室

「労働運動の現段階」 戸木嘉久立命大経済助教授

「戦後日本民主主義運動と憲法」 長谷川正安名大教授

「知識人の今日的課題」 芝田進平法大助教授

シンポジウム 於知恩寺 講師 戸木田・長谷川

・芝田

★第19回 昭和40年

基本テーマ「未来をつくる私達の学問」

6月4日 河上祭の夕べ 於京都教育文化センター

講演 宮川実

映画 「ある母の回想」

6月5日 講演会 於京大法経第一教室

「国際情勢について」 小原広勝立命大教授

演題不明 ぬやまひろし(詩人)

「科学に新しい息吹きを」 坂田昌一名大教授

シンポジウム 於知恩寺

★第20回 昭和41年

基本テーマ「ともに築こう我らの学問」

6月3日 河上祭の夕べ 於京都府立第二ホール

来賓挨拶 末川博

記念講演 堀川虎三

演劇 「河上祭」 京芸・人間座

6月4日 講演会 於京大法経第一教室

「民族解放闘争の世界史的意義」ベトナム問題を中心にして 岡倉古志郎AA研究所長

演題不明 武谷三男

「現代青年の課題」 林田茂雄

シンポジウム 講師 武谷・林田他 於中央食堂

★第21回 昭和42年

基本テーマ「学問を平和と人民のために——せまりくる軍靴に抗して——」

6月7日 河上祭の夕べ 於京都府立第二ホール

あいさつ 末川博ほか

講演 「軍国主義と反共思想」 柳田謙十郎

映画 「キムドン」

6月9日 シンポジウム 於京大法経第七教室

「知識人・学生は労働者から何を学ぶか」

6月10日 講演会とシンポジウム

「京大70年の歴史と大学のあり方」池上偉京大助教授

「労働者階級は大学人に何を望むか」細井宗一(国労中執「軍学協同にたいする科学者の願い」牧二郎基礎物理学研究所教授

★第22回 昭和43年

基本テーマ「民主運動と学生の任務——反動の嵐の中で——」

6月5日 シンポジウム 於教養40番

「学生の任務とは何か——統一戦線の発展をめざして——」

6月6日 河上祭の夕べ 於京都府立勤労会館

あいさつ 末川博・谷口善太郎・山岡亮一

講演 「今日の内外情勢と青年学生の任務」

映画 「ベトナムの少女」 横山正彦

6月8日 講演会 会場不明

「労働組合運動の現局面と今後の展望」 戸木田嘉久立

「河上祭の『経済学入門』について」 見田石介大阪大教授

★第23回 昭和44年

基本テーマ「ファシズムか民主主義か」

6月4日 河上祭の夕べ 於京都府立第二ホール

あいさつ 末川博前立命館総長・堀江英一(京大経済学部長・堀川虎三京都府知事

講演 「70年安保と大学問題」 長谷川正安名大教授

6月5日 講演と映画 於京大法経五番教室

映画 「西口克己(作家)」

6月6日 シンポジウム 於京大法経二番教室

「河上祭の経済学をめぐる」

6月7日 大学問題ティーチ・イン 於京大法経一番教室

講師 川口京大助教授・置塩信雄神戸大教授

★第24回 昭和45年

基本テーマ「平和の真実のために——この70年代を我々はいかに生くるべきか——」

6月3日 河上祭の夕べ 於京都府立第二ホール

あいさつ 末川博立命館総長・木原正雄京大経済学部長

講演 「高度成長と独占の70年代構想」

6月4日 講演と映画 於京大法経五番教室

「この70年代を我々は如何に生くるか」

置塩信雄神戸大教授

映画 「京都府知事選」 「ベトナムの少女」 「グエ

ン・パン・チャイ」

6月6日 シンポジウム 京大法経七番教室

「統一戦線発展強化のために」

6月9日 茶話会「河上先生と我々」於京大楽友会館

★第25回 昭和46年

基本テーマ「科学か非合理か——この70年代を我々はいかに生くるべきか——」

5月29日 フォーク集会 於京大法経中庭

6月2日 河上祭の夕べ 於京都府立第二ホール

あいさつ 大野英二京大経済学部長・末川博

講演 「現代学生の意識状況と生きがいについて」

島田豊日本福祉大教授

映画 「キューボラのある町」

6月3日 講演と映画 於京大法経五番教室

講演 「経済学をいかに学び、生きるか」見田石介

映画 「にあんちゃん」

6月4日 シンポジウム 於京大法経五番教室

「現代学生意識と生きがいについて」池上偉京大助教授

6月5日 シンポジウム 於京大法経五番教室

「経済学をいかに学ぶか」 林直道報告他

★第26回 昭和47年

基本テーマ「学ぶことと生きること——学問と社会の接

点——」

6月5日 河上祭の夕べ 於京都府会館第二ホール

あいさつ 泰山京大経済学部長

講演 「われわれにとって学問とは何か―河上博士の生き方と関連して―」 末川博立命大名普総長

6月6日 於京大法経五番教室

講演 「河上肇と現代」 細野武男立命大総長

映画 「続・男はつらいよ」

6月7日 特別連続講演 於京大法経五番教室

「公害と学問」 宮本憲一大阪市大助教授

「物価値上げと学問」 金子ハルオ都立大教授

★第27回 昭和48年

基本テーマ 「学問と民主主義」

6月11日 河上祭の夕べ 於京都府教育文化センター

あいさつ 末川博立命館名誉総長・木原正雄京大経済学部長

講演 「大学と社会」 和歌森太郎東大教授

映画 「母」

講演と映画 於京大法経第五教室

6月12日 「民主主義と選挙制度」 田口富久治法政大教授

講演 「七人の侍」

映画 於京大法経第五教室

6月13日 川口是京大教授

映画 「女教師ハイ」

★第28回 昭和49年

基本テーマ 「現代民主主義の諸課題」

6月6日 河上祭の夕べ 於京都府教育文化センター

あいさつ 末川博立命館名誉総長・小野一 郎京大経済学部長

講演 「河上肇の思想」 畑田重夫日朝協会理事長

映画 「小林多喜二」

6月8日 講演会 於京大法経第五教室

「刑法改正の諸問題」 佐伯千賀弁護士

★第29回 昭和50年

基本テーマ 「学問と社会」

6月10日 河上祭の夕べ 於京都府会館第二ホール

あいさつ 末川博立命館名誉総長

講演 「河上肇の貧乏物語」 杉原四郎甲南大教授

映画 「不滅の足跡」ヴィクトル・ハラ・生と死」

講演 宮本憲一 大阪市大教授

6月14日 於日本イタリヤ会館

★第30回 昭和51年

基本テーマ 「現代と学問」

6月5日 河上祭の夕べ 於京都府教育文化センター

あいさつ 末川博立命館名誉総長

講演 「河上肇先生を偲ぶ」 蟠川虎三京都府知事

映画 「ダラスの熱い日」

6月7日 映画 「鉄道員」 於京大工学部土木総合館

6月12日 講演 於日本イタリヤ会館

「新しい価格革命」 宮崎義一京大経済研究所教授

★第31回 昭和52年

基本テーマ 「科学とヒューマニズム」

6月9日 河上祭の夕べ 於京都府教育文化センター

記念講演 「ヒューマニズムについて」 島田豊日本福祉大教授

映画 「サンチャゴに雨が降る」

6月11日 映画会 「金環蝕」 土木総合館

6月14日 講演 「京都大学の創設者たち」 梅原猛京都芸術大学長 於日本イタリヤ会館

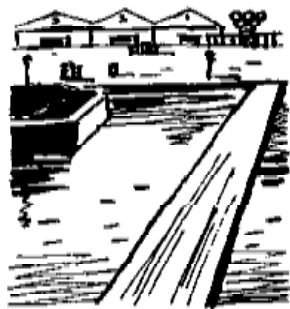
嘗ての河上祭の人達より(1) 河上祭のおもいで

内 田 正 志

突然の原稿依頼でとまどっています。

私が第何回か忘れましたが河上祭の実行委員になってた(ということ

すら忘れていました、ほんとに！)のは、私が三年の時でしたから、一九六六年のことだったと思います。その頃は、どういうきっかけであったかは覚えてませんが、法経新館の地下にあった自治会ボックスに、毎日のように出入りしていました。学生学会の事務をとっておられた永田さんやらボックス常連の学生共と議論したり、碁をうったり、とにかく毎日大学へは欠かさずいくんですが、ほとんど授業に出ることもなく(考



えてみると、大学の専門課程二年間で何単位か修得(?)したうち、最初から最後まで授業を満足にうけ通したのはワソ・イツワリなく皆無でした。―これが私の大学生活の最大の自慢なのです。―真面目に学生運動のまねごとらしきことをやっていました。そんな関係で河上祭の実行委員にえらばれたんだと思います。

どんな仕事を担当したかは忘れましたが、奉賀帳をもって、河上先生ゆかりの人々をまわったことはおぼえています。なくなられた末川先生もお尋ねして、メッセージをいただいたように記憶しています。先生は当時から立命館大学の総長をされていたが、初対面でコチコチになっている私達を気さくに総長室へ招き入れてくれ、原稿とカンパをいただいたあと、いろいろはなしてくれました。たしか、アメリカの原子力潜水艦スレッシャー号が太平洋で沈没するという事故のあった直後で、そのことが話題になったことをおぼえています。他には、河上先生の弁護をされた方とかで、大学のすぐ近所に住んでおられた方や、美留軒という散髪屋さんもあったと思います。とにかく河上先生という方は、ずいぶん大衆的な方だったんだなあと、その奉賀帳をもってまわった相手の人々の層の広さに、あらためて感心させられたものでした。

河上祭は確か祇園会館であったと思います。そして、その会場で、河上先生の書斎で資本論を読んでおられる姿の絵と、先生の直筆をそれぞれ複製して、セットで販売しました。私の机の上の壁には、今もその二枚が額に入れてかざってあります。その文句は、「凡そ学に志す者は才の乏きを悲む勿れ、努むることの足らざるを恐れよ……」と書いてあります。そして先生が資本論を読んでおられる研究室は、これも今はなき故吉村先生の研究室になり、したがって吉村ゼミ生であった私は河上先生ゆかりの研究室にも何度も足をふみいれていたというわけです。

別に感傷的になるつもりは毛頭ありませんが、私も今や三十六才、中年と

俗にいわれる年になって、昔よく口に出していた、「京大反戦自由の伝統」とか「河上精神」とかいふものの何であるか、いかに大切なものであるかということがおぼろげながらわかってきたようにおもふこの頃です。河上先生の自叙伝にもありましたように、先生が死ぬまで自己の生き方を真剣に追求していかれた筈こそ、今になって、私もそのむすかしさ、又大切さがわかるような気がしています。

私は今、神戸市役所に勤めていますが、そのかたわら、兵庫県部落問題研究所にも出入りし、部落問題の解決のために多少なりとも役立ちたいの思いから微力ながらもとりくんでいます。これまで、大学時代、そして卒業後も、ほんとに自分で定めた何らかの目標というものをもって生きてきたかという大いに疑問でしたが、最近になって私もようやく、やや大げさかもしれませんが、人生の目標のようなものをつかんだような気がしています。

河上先生の教えを守り、「才の乏しさをなげくことなく、努力の足りなさを恐れ」てこんども部落問題解決のためがんばります。

最後に宣伝を少し―兵庫部落問題研究所の月刊誌「部落問題」・年間誌代・送料共三、四〇〇円をぜひご購読ください。くわしくは、電話神戸(〇七八)三五一一五二六五まで。

嘗っての河上祭の人達より(2)

河上祭と私

下野克己

京都大学の経済学部には、いろいろまよったあげくの入学でした。高校三年の夏休みまでは、理学部に入学したいと思っていました。現在、自からの才能の乏しさを嘆くことが多い毎日ですが、経済学部に入學し

ただ、後悔しておりません。その最大の理由は、河上祭を通して河上肇先生の生き方の一端にふれることができたことです。そしてまた、「京大河上祭実行委員」ないしそのとりまきとしていろいろやっているうちに、気がねなくつきあえる多くの友人を得ることができたことです。さらに、現代日本経済史の担当者という、先生の活躍された二〇世紀前半の日本資本主義の社会経済状態について研究し学生に対して講義をする大学の教員になったことも、第一八回（一九六四年）と第一九回（一九六五年）の二回の河上祭に積極的に参加しえたことが、大きく影響しているように思われます。

それにしても正直なところ少々びっくりしました。卒業後十年以上もたってから「河上祭実行委員」であつたことを理由に原稿を書かなければならないとは、思ってもみませんでした。私にとって河上祭とは、自分が「実行委員」としていろいろやつたことよりも、経済学部の一学生として先生の生き方について認識を深めることのできた機会として、より重要な意味を持っています。むしろ、「実行委員」であつたということとは忘れかけていたといつてもよいでしょう。確かに、河上祭のパンフレットや「河上肇先生の書（遺墨）並びに画像」や「河上まじゅう」（どういうわけかまじゅうがあつたように思われるのですが、記憶が正しいでしょうか？）などを取扱つたような感じは残っています。しかし、準備のために「実行委員会」で何を討論したのか、成功させるためにどんなことで苦労したのかなど、肝心なことは何にも覚えておりません。ですから、河上肇記念会会報の「河上祭」特集号用に「実行委員」としてのおもいで原稿を書くようにといわれても、河上肇記念会の諸先輩は勿論のこと現在の「実行委員」の学生諸君に読んでいただけるようなものは、はっきりいってあまり書けそうもないということです。

ただ、経済学部の一学生としてのおもいででもよいということになれ

ば、もう少し書かせていただければよいでしょう。「実行委員」などとして積極的に参加しえたのはたった二回だけだったかもしれませんが、無条件的ともいえるような尊敬の念を先生の生き方に対して抱くようなきっかけとなったのは、ほかならぬこの河上祭であつたことは疑う余地もありません。それも、「実行委員」としてかわる以前の河上祭であつたように思われます。そのため河上祭のパンフレットだけは、自分が入学する以前の第一四回（一九六〇年）から卒業してしまつた後の第二三回（一九六九年）まで十回分を入手しており、現在でも大切に持っています。また、先生の多数の経済学的業績については充分検討する機会はなかつたのですが、経済学研究科の大学院生であつた時に、先生の『自叙伝』について京大生協の機関紙『協同』にはりきつて原稿を書いたことを思い出します。岡山からしょっちゅう京都に出かけるというわけにはいきませんが、それでも京都で時間があるような時には法然院の先生御夫妻のお墓の前で、静かに一時を過ごすこともあります。そういう時はほとんどいつてもいいほど、先生の「凡そ学に志す者」の遺墨を思い出しつつ自らを一所懸命に励ましているのですが……。

嘗つての河上祭の人達より（3）

古典としての河上肇

伊 藤 努

私は、職業柄、「河上文庫」など、意義の高い図書に触れる機会に恵まれています。価値と共に弁証法的叙述における批判も大きい高島素之訳の「資本論」、第一巻四編十二章までに終わった河上・宮川博士共訳の「資本論」、楠田民蔵全集等々……というように、そのためかえて迷ってしまうわけです。私共の年代にとって河上肇とは、河上博士を直接、又はそれに近い形でご存知の年配の方々が抱くイメージとは異なり、歴史

上の人物という印象が強い。だから、その摂取のしかたも変わってくるわけです。人間としての河上像は、その独特なヒューマニズムと、厳格さで、末川先生をはじめ多くの方々から、数多くのエピソードと共に語りつがれてきたわけですが、私の年代、そして、研究にたずさわっているわけではない私のような者、又、これから経済学を学んでいこうとする人達は、河上博士の学問体系を、優れた研究者達に吟味され、継承されてきた日本の経済学の古典として受けとめていく態度が、まず大切だと思います。その上で、河上肇の真理に対する貪欲さ、人間性の豊かさを取り入れていくべきです。

「社会問題研究」の刊行を境に、それまでの社会改良主義から、階級的視点の確立に至り、以降その著作は、「マルクス経済学」「資本論入門」「経済学大綱」と続き、日本のマルクス主義の前進と、社会運動の礎となったことは、多くの解説書にも記されているわけですが、その中で特に「資本論入門」は博士自身も書いているように河上の研究の集大成であったわけです。つまり、博士は、経済学の原点として古典「資本論」をどれほど努力して日本に普及させようとしたかがうかがえます。河上博士の著作に限らず、日本を含む世界の古典を、もっと多くの人々が学んでいかなければならない。そうした古典を学ぶ層の広がり、日本の代表的な経済学者河上肇の精神を支えていくものだとすることを、博士自身の活動から教えられているのだと思います。（筆者 京都府立総合資料館勤務）

嘗ての河上祭の人達より（4）

河上祭思い出すまゝ、

永田量子

私は昭和二十九年から四十四年まで、京大経済学部学生自治会（同好

会）で書記のような仕事をしておりました。河上祭のことといえば、第八回から第二十三回までということになりました。足掛十六年間のことですから、河上祭の思い出は数限りなく、今となつては、すべて懐しく思われることばかりです。

最初の頃は、私と同じ年頃の学生さんのお付き合いでしたが、当方だけが齢をとっていくものですから、今振り返ってみると、同じ河上祭の思い出もその色合いが年々によつて、かなり違っているように思います。もちろん世の中の変り様にもよるのでしょうが。

学校を出て、はじめての職場でのことであつたせいもありましたが、何といつても、私にとつては、昭和二十九年頃の河上祭のことが一番強く印象に残っております。現在にはもうありませんが、あの懐しい赤レンガの法経の建物、その玄関横にあつた自治会ボックスは、毎日自治会の委員はじめ、いろんな学生さんがたくさん出入りし、今聴いてきたばかりの講義について議論が沸騰し、たばこの煙のたちこめるなかで、遂には天下国家に及ぶという熱気の溢れた雰囲気でした。そして皆さん、均しく河上先生の真摯な生き方に共鳴し、河上肇こそ京大経済学部のシンボルだという共通の思いが、青春の友情を深めていく情景に私も一緒に感動したものでした。

当時の河上祭は一月の末頃でしたから、その頃になると、自然と河上祭のムードがでてきて、これらの学生さんが一勢に張切るのでした。だから盛り上りました。全学で取り組みました。学部長を中心に多くの先生方も御協力下さいました。だから本当にお祭りのような気分楽しくやりました。

西部講堂での前夜祭、今でもその会は続いているそうですが、経済懇談会（ケイコン）というグループの学生さん達を中心に、ロシア民謡で構成したシユルエット・オペラ「ともしび」という珍劇に私も狩

り出されました。セミ・プロ級の京大学生劇団「風波」の時局風刺漫才等々。地域の人達も大勢来て下さいました。とても賑やかでした。そして「河上鯉頭」です。老舗亀屋の「河上鯉頭」は河上祭の風物詩にもなっております。この鯉頭は昭和四十二・三年頃まで続いていたと思います。講演会、シンポジウム、映画会などが、毎年恒例の行事であります。兄河上を親しく語られる末川先生のお話、毎年必ず御出席下さい、毎年必ず違ったお話をされて、学生さんに大変人気のあった前知事、蟻川先生。

こうして書いておきますと、更にあれこれと思い出されてくるのですが、自治会ボックスが法経七番教室の地下に移った頃、昭和三十五・六年でしょうか、その頃から少じつづ学生さんの考え方や気持が変って来たように思います。もちろん河上祭はそれ以前と同じような内容で、ずっと続いていくのですが、自治会ボックスでの熱い議論もだんだん聞かれなくなり、河上祭も年中行事化した感じで、実行委員になってから慌てて「貧乏物語」などを読み出すという学生さんも出てきたり、何かしら以前のような盛り上がりを感じられなくなりました。最後の方は、河上肇をどうP・R（？）するかが、河上祭の苦労種という状態ではなかったでしょうか。

こんなふうに感じ出してきた頃、今でも強く印象に残っている一人の学生さんがおりました。なぜ京大にきたかを、彼はこう私に語ってくれました。彼は所謂苦学生で、働きながら高校へいったとき、河上先生の「貧乏物語」を読んで、ひどく感激し、毎晩枕元において寝た。自分のいくところは河上先生のいた京大経済学部しかないと思った。ということでした。彼は河上祭実行委員会のリーダーとなり、今日の学生学会（インターゼミ）草分けの活動家でありました。もうこの時期においては、彼などは珍しい学生さんでありました。

こうしてみますと、私のいくらか関わってきた十五・六年間の京大河上祭も、社会の変化とともにあったといえるのですが、真理を愛し真理にのみ忠実であれと教える河上精神は不変のものだと思います。守り続けていかなければならないと思います。第三十二回河上祭の成功を心からお祈りいたします。

（筆者 朱い実保育園園長）

河上肇への二つの接近

内 海 庫 一 郎

今日、我々が河上肇について語る場合に、大別して二つの立場、二つの接近の仕方があるのではなからうか、その一つは人間的接近の立場とでも言うべきもの、別な一つは学問的接近の立場と名付けたらよさそうなもの、がそれである。この二つのものは必ずしも相互に矛盾するものではないが、重点の置きどころがハッキリちがっている。

第一の立場、人間的接近の立場で、河上を問題にする人々は、河上の学問的業績というようなことには余りこだわらない。彼らは、足尾鉾毒事件の演説に感動して外資を寄附する河上、無我死にとびこむ河上、勤王二等、大臣並みの地位を樺にふって、共產党にとびこむ河上、自分の共産主義に対する帰依信仰を牢獄生活に耐えることによって証した無私の求道者、河上をこよなく愛し、いとむのである。なるうことなら河上のように生きたい、とさえ思っているかもしれないし、そうでなくても、俗人で一杯のこの国になくてはならぬ清涼剂的存在だ、と感じている。私はいろいろな形で河上肇を記念する行事をみるにつけ、この型の河上ファンが意外に多いのに気付く。「唯物史観に関する自己清算」や「マルクス主義経済学の基礎理論」などの河上の学問的業績を、こ

の人々は多分読まないであろう。彼らがもし河上の書いたものを読んだとすれば、それは「自叙伝」であり、「遠くでかすかに鐘がなる」のたぐいではないであろうか。それよりむしろ、床の間に、河上の書をかざる方がもっとピッタリするかもしれぬ。

この意味における河上肇の現代的意義は重要であり、必要である。この意味の河上肇は万世の師表たるべき立派な人物、立派な求道者であり、「世が世なら吉田松蔭にも比すべき」偉大な教師であり、河上精神は継承され、発展させられねばならない。

私は、現在の河上思想の研究者の圧倒的多数をしめる——マルクス主義ならぬ——マックス・ウェーバー主義者の河上肇への接近の仕方に、上述のような心情派と非常に良く似た感じ方、考え方があるような気がしている。河上を、歴史の流れからとりはずし、河上個人に還元したうえで、その行為の内在的意味を説明してゆこう、として、河上を動かしたものは彼の儒教精神か、それともキリスト教の影響か、というような点へ問題がしばられてゆく、あのウェーバー的方法について、それを感じるのである。

私の独断的な考えによると、河上先生といえども、しよせん、時代の子であり、歴史の流れにながされた「ちっぽけな存在」(チェホフ)の一人ではなかったろうか。河上的人間像を、時代の中におきなとし、彼の考え、彼の振舞を、時代の動きと共に考察してみるのも、また別な一つの接近ではあるまいか。これに対して第二の立場からすると、河上の人柄とか生き方というものは一応二の次の事柄になり、彼の思想と学問的業績、特に日本におけるマルクス主義の建設者としての彼の仕事が、その現代的意義の視点において問題にされる。一般に事物を究めるのに、必ず、その生成、発展を考察せよ、とする研究方法上の要請からすれば、現代、現時点の日本のマルキシズム、というより社会科学一般を正しく

理解するためには、少くとも河上肇とその時代に遡らざるを得ない。特にこの二十年あまり、混乱に、混乱を重ねている、この国のマルクス主義のあり方を考えてみる場合、河上肇とその時代への遡及と、その科学的な、いわば容赦のない再検討が必要になってくるのではないだろうか。一体この混乱は河上型のマルクス主義の欠点に由来するものなのか、逆に河上型から大きく乖離して初心を失ったことに由来するものなのか、今我々は、頭を冷して、この問題を考えてみなければならぬのではあるまいか？我々はいま静かに、小人数の「河上肇とその時代」の研究会ではじめてみることにしようか。勿論すぐ「実践に役立てよう」などというのは、この研究は成功しないが、古い世代のものなら誰でも知っているように——というのは河上肇を個人的に知っている、先生の講義や講演をきいたとか、「第二貧乏物語」を読んで感動したとかいう世代はいま急速に失なわれつつあるので、その世代の「モヒカン族の最後の者」である私のような者が、こんなことを書かねばならない破目になったのだが——日本における最初のマルクス主義の立場で貫かれたエンサイクロペディアは、河上が大山郁夫と二人で編輯した「マルクス主義講座」全十三巻であった。それをそれ以前の「社会問題講座」と比較してみるならば、誰もが、その変りざまに驚くことであろう。今はマルクスにあきたりなくなっている松田道雄が岩波新書に書いた「私の読んだ本」でも、この講座は大きな役割りを演じている。この講座で、服部之總と野呂栄太郎が、マルクス主義に依拠する現代日本研究の先駆者として登場し、また、同じ服部によって、福本和夫と三木清の哲学についてののはじめての本格的批判が行われた。また河上肇編輯の別な全集『改造社版「経済学全集」』は河上のマル経研究の最後の到達点だった。「経済学大綱」と「マルクス主義経済学の基礎理論」をふくむばかりでなく、山田盛太郎、宇野弘蔵、そして中山伊知郎の論壇への登場の合図で

もあつたのである。

こおいう立場から河上をみれば、それは決して一個人河上肇の理解の問題ではなく、河上が最も河上らしく生きた、と思われる時代の河上肇と交叉関連する一連の人々、特に柳田民蔵——考えてみるとこの人の学問的生涯の大半は河上肇を批評することで費された、といえそうである——、福本和夫——この人は何よりもまづ河上批判者としての意義において重要だったろう——、三木清——この人は、河上の哲学の形成に多大の影響を与えているだけでなく、日本の哲学界に唯物弁証法を持ちこむのに決定的な役割を演じたように思われる——等々。それに河上の論敵であつた福田徳三、小泉信三、更に彼の友人達や弟子達（恒藤恭、末川博、森耕二郎、嵯峨虎三、岩田義道等々）を、一つの総体として採り上げて、その時代的背景、思想的前提と共に研究されねばならないのではなからうか。なおこのまゝに柳田国男とか西田幾太郎もあげておいた方がよいかもしれない。（私はさき頃、京都府総合資料館の館長以下の人々に、河上肇の下駄まであつめるのも良いが、河上と深いかかわりあいのあつた人々に関する文献を河上関連文献として蒐集し、河上文庫の一部として是非蒐集してくれるように要望しておいた）。天野敬太郎氏の文献目録にあがつている文献が全部そろえられたら、どんなに河上研究に便利だろう。

河上肇を記念する会を旧世代の死滅で終らせるか、それとも改めて、河上肇とその時代の研究に若い世代の人々にとりかかってもらうことにするか、これが現時点での問題であるように思えてならぬ。

（一九七七年二月一四日）

河上肇とその周辺を記録する会・発足

河上肇とその時代の「証言者」が少なくなっています。その証言の聞き取りを少し急がねばなりません。そんな思いから、河上肇記念会の会員などで「河上肇とその周辺を記録する会」ができました。

打合せ（Ⅱ研究会）——聞き取り（Ⅱテープ録音）を繰り返していきたいと思ひます。職業・年齢・男女を問いません。有志の参加を歓迎します。

記念会の会員諸氏には、今後いろいろと御協力いただかなければなりません。誌上をお借りして、御案内かたがた、宜しくお願い申し上げます。

〒616 京都市右京区竜安寺御陵下町一番地
青蓮庵（立命館大学衣笠校舎西端）

河上肇とその周辺を記録する会

電話〇七五―四六三―九五一八

事務局だより

◆一月二十四日、午後六時より当会事務局の小泉民次氏の下鴨ペンションに於て、事務局一同、本年度初の打合せ会を開く。

◆二月十六日、午後四時より三高同窓会館に於て末川家主催の末川先生一年忌法要。近しい方々のみ二、三十名出席、先生生前の活動や面影を伝える映画の上映などあつて、思ひ出話がはずみ、令息末川清氏から御丁寧な御挨拶があつた。記念会を代表して大門が参詣、供花して来まし

た。先生を失ってから、早くも一年、感深し。

◆二月二十四日大門上京、一ツ橋学士会館に於て東京河上会、白石、野口、生沼諸氏と会談。生誕百年記念事業につき打合せ、堀江昌一氏の計画と多少の齟齬があり、これとは別に東京河上会、河上肇記念会が主体となつて自主的に企画すべき事を確認。この件については東京河上会の次の幹事会に於て堀江氏と話し合うとの事であつた。

◆三月十五日、大阪梅田第一生命ビル好文クラブに於て例会開催。講師喜多川栄三氏（講演内容次号掲載）。

◆三月三十日、大門上京、東京河上会幹事諸氏と学士会館に於て会談。そのあと、大門は小林直衛氏を見舞い、さきに記念会で作製した河上先生法然院歌碑拓本を御見舞として呈上。

◆四月十七日、東京青山葬儀場に於て午後一時より、故小林直衛氏の大月書店社葬。大門が参列、東京河上会と河上肇記念会を代表して住谷悦治の弔辞を捧ぐ（大門代読）。

◆五月八日、恒例の春季懇親会を京大白川会と共催で、落西桂の小泉千福菴園にて開催、会する者約三十名、例年通り福田秀爾九十叟も御元氣に出席、大声で御話を承った。東京よりは野口、阡陌両君来会、久し振りに松田道雄氏も見えて好天に恵まれて愉快な一日であつた。

◆五月十日、大月書店平専務、先日社葬の答札に住谷先生並に大門を来訪さる。

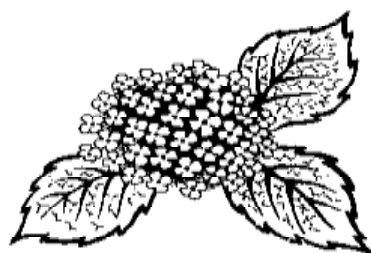
◆五月十三日、東京河上会の青木宏氏、東京河上会の意をうけて来阪、生誕百年記念事業の件につき堀江氏との調整の問題であるが、この件については河上肇記念会の意見をまとめて近く東京並びに堀江氏に打合せに行く事にする。

◆京大河上祭実行委員会と懇談、打合せ、四月二十七日午後五時半より、京大楽友会館で。学生諸君六名、当会事務局三名出席。

編集後記

一年に四回出すと、約束した会報も、今年になって、やっとこの号がはじめて、もう六月である。気が急ぐが原稿の集まりが、思わしくない。嘗て河上祭に關係した四十数名の諸氏にお願いしたのが、結果はご覧のとおり。前の「各世代の河上像」で特集したときは、今回とはほぼ同数の方々をお願いして、二十一編もいただき、正直びっくりした。原稿依頼先は、今回は全部が京大O・B、そして戦後卒。前のときは殆んどが、ノン京大、戦前、戦中、戦後の各世代、職業も多岐にわたった。こんなことから、いろいろのことが考えられる。この際、いくらか参考になりはしないかと、河上祭略年表を作ってみた。府立総合資料館の資料によつたが、十七回以前、二十・二十三回、三十一回の河上祭パンフレットが欠号となつていた。お持ちの方コピーでも提供願いたい。

東より武蔵大 内海教授の提言、西では、河上肇とその周辺を記録する会^①が発足、次代への胎動か。（O・S）



お願い

生誕百年記念事業に関するアンケート

来年の昭和五四年は、河上先生生誕百年に当たります。記念行事の気運が起っておりまゝ。広く会員諸氏からご意見を承り、盛大なものにしたいと思ひます。下記のアンケートにご協力下さい。

同封はがきでご回答願ひます。

① 1. 択一式ではありませんので、いくつ丸をしていただいても結構です。

2. “その他”に丸をされたら、貴殿のアイデアを是非。

3. 匿名でも結構です。

I 次のような行事が考えられますが……

・ 講演会 (I-1)

・ 遺品展 京都府立総合資料館(河上文庫、遺品等収蔵)で (I-2)

・ “ 都心のデパートで (I-3)

・ シンポジウム (I-4)

・ 会員交歓会 (I-5)

・ 法然院法要、墓参 (I-6)

・ その他 (I-7)

II 次のような事業が考えられますが……

・ 河上映画の製作 (II-1)

・ 河上研究入門書の刊行 (II-2)

・ 河上肇記念賞(研究、社会運動などで功績のある個人、団体を毎年顕彰する) (II-3)

・ その他 (II-4)

III 何月がいいか?—諸行事は東京と関西で催されることになると思ひますが、いつ頃がよいでしょうか。

・ 1月 (1月30日逝去) (III-1) ・ 7月 (III-7)

・ 2月 (III-2) ・ 8月 (III-8)

・ 3月 (III-3) ・ 9月 (III-9)

・ 4月 (III-4) ・ 10月 (10月20日生誕) (III-10)

・ 5月 (III-5) ・ 11月 (III-11)

・ 6月 (III-6) ・ 12月 (III-12)

IV 推進母体—関西に“河上肇記念会”(会員二〇〇名、会報送付先八〇〇)東京に“東京河上会”(会員一四〇名)があります。記念事業の推進母体として、いずれ実行委員会のようなものを作る必要があると思ひますが……

・ 関西、東京別々に作る。 (N-1)

・ 関西、東京一本化したものを作る。 (N-2)

・ 作るときは委員を各界、各世代、広範に委嘱する。 (N-3)

・ 作る必要はない。現在の事務局でやればよい。 (N-4)

V 資金を作るのにどんな方法をとったらよいでしょうか。

・ 奉賛帳をもって廻る。 (V-1)

・ 記念品(例えば、歌碑壁掛など)を作り、それを活用する。 (V-2)

・ 有名会員の色紙の記念セールをやる。 (V-3)

・ その他 (V-4)

御協力ありがとうございました。